

東京美術學校生徒卒業製作材料補給内規 明治四十四年七月十五日

第一條 各科卒業期生徒ニハ一人ニ付左記金額ノ範圍内ニ於テ卒業製作ニ要スル材料ヲ補給ス

前項ノ費用ハ同科内ト雖彼我流用スルコトヲ得ス 但シ共同製作ヲ許可シタル場合ハ此限ニアラズ

日本畫科 金拾五圓以内

西洋畫科 金拾五圓以内

彫刻科塑造部 金貳拾五圓以内

同 木彫部 金貳拾五圓以内

同 牙彫部 金貳拾五圓以内

圖案科 金拾五圓以内

金工科 金四拾圓以内

鑄造科 金參拾五圓以内

漆工科 金七拾五圓以内

第二條 材料ハ當該教官ニ於テ監督シ殘餘ヲ生シタルトキハ之ヲ返納スベキモノトス

第三條 本内規ニ依レル作品ハ生徒ニ於テ一部ノ材料ヲ自辨シタル場合ト雖本校ノ所有ニ歸スベキモノトス

但シ特ニ自費ヲ以テ製作スルコトヲ許可シタル場合ニアリテハ其作品ハ本人ニ交付スルコトヲ得

第四條 補給費額ハ各科主任教官ノ見込ニ依リ本内規ヨリ減額スルコトヲ得

第五條 圖畫師範科生徒ニハ本内規ニ依リ卒業前ニ於テ金七圓以

内ノ製作材料ヲ補給スルコトヲ得

(「自明治四十四年一月 教務内規、諸規定書類(教務掛) 至」)

① 東台画会(第一〜第三回展)

明治四十四年十二月十七日、本校日本画科の教員、卒業生、生徒から成る東台画会が組織された(516頁記事参照)。これは単なる同好者の集まりではなく、学校ぐるみの大組織で、正木直彦が会長に就任し、結城素明、山脇皓雲、勝田蕉琴、平田松堂、松岡映丘が委員に任命された。

第一回展は翌四十五年三月二十九日より四月四日まで本校工芸部教室で開催された。このときは校友会月報にも「出品百餘點に過ぎず、聊か物足らざる感あり」と記されているようにあまり成績は上がらなかったらしい。ただし、『東京朝日新聞』(三月三十日)は

○東臺畫會展覽會 東京美術學校舊卒業生(卒業生および在校生)の日本畫家が新たに組織したる同會は廿九日より來月四日迄同校内に第一回展覽會を開いて居る、中に就て觀るべきもの二三を擧ぐれば友田活夫(治)氏の「魚籃」山下筑水氏の「枯野」吉原雅風氏の「山家の夏」本多天城氏の「山水」山村耕花氏の「湯女」小泉青堂氏の「羅漢」水島爾保布氏の「羅馬遣使」鶴田機水氏の「金溪の夏」伊藤龍涯氏の「大佛供養」で其他には隨分思ひ切つた珍作もある、最後に結城素明氏の「竹林七賢」と平福百穂氏の「東北の女」とは例によつて群を離れた天才的作品である事を一言して

置く

という短評を掲げ、素明、百穂の作が抜群の出来であったことを報じている。

第二回展は大正二年五月三日から同月三十日まで開催された。このときは体制も整い、上野公園竹の台陳列館を会場として大々的に開催され、宮内省の買上げなどもあった。この展覧会の際に同会が東宮大夫に提出すべく作成した行啓陳上書（野紙に墨書。正木直彦印）が現存しており、これに会則（印刷物）と会員名簿が添付されているので全文を掲げておく。ただし、行啓は実現せず、実際は陳上もなされなかったのではないかと思われる。

東京美術學校ハ明治二十年十月四日勅令第五十一號ヲ以テ設置セラレタル本邦唯一ノ官立美術學校ニ有之 就中其一分科タル日本畫科ハ本邦美術ノ沿革上各分科中最モ重要ナル地位ニ在リ創立以來卒業生ヲ出スコト二十有三回総人員三百六十一名ノ多キニ達シ現ニ生徒九十六名ヲ教養致シ居リ本校教育ノ旨トスル所深ク本邦美術ノ歴史ニ顧ミ具サニ古畫ノ真髓ヲ究ムルト共ニ廣ク世界藝苑ノ趨勢ニ鑑ミ大ニ新畫ノ作興ヲ圖リ聖代ノ文化ニ少補アランコトヲ期スルニ在ルヲ以テ日本畫科教官卒業生一同其責任ノ重大ナルヲ感シ爰ニ一同協心戮力益々心匠ヲ鍊磨シ技能ヲ熟達セシムルコトヲ圖リ作畫ヲ一堂ニ陳列シテ公衆ノ觀覽ニ供スルハ極メテ緊要ノ事ナルヲ思ヒ一昨明治四十四年十二月職員卒業生及ヒ生徒ヨリ成ル東台畫會ヲ組織シ昨明治四十五年四月第一回繪畫展覽會ヲ東

京美術學校ニ於テ開會致シ良好ノ結果ヲ収メ候ニ付今般更ニ第二回繪畫展覽會ヲ本年五月三日ヨリ五月三十日迄上野公園竹之臺陳列館ニ於テ開設シ會員ノ近作品ヲ陳列致シ候處陳列品中優秀ノモノ尠カラス會員一同努力奮勵ノ結果モ相見エ候間甚タ恐懼ニ堪エス候ヘ共本邦繪畫御獎勵ノ御趣旨ヲ以テ特ニ行啓ヲ仰クヲ得ハ本會ノ光榮之ニ過キス 四百有餘名ノ會員一同ハ

洪恩ノ優渥ナルニ感激シ益々奮勵努力シテ本邦繪畫ノ發達ヲ期シ以テ政府教養ノ趣旨ニ副ヒ得ヘシト確信仕候 仰キ冀クハ前陳ノ微意可然御仰上相成候様伏テ奉懇願候

大正二年五月十二日

東台畫會

會長從四位勲四等正木直彦〔朱文方印〕

東宮大夫男爵波多野敬直殿

東台畫會規則

- 第一條 本會ハ東臺畫會ト稱ス
- 第二條 本會ハ事務所ヲ當分東京美術學校内ニ置く
- 第三條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ全ウシ技術ノ發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ東京美術學校日本畫科卒業生ヲ正會員トシ同科在學生ヲ準會員トシ前校長及ヒ東京美術學校卒業生ニアラサル現任日本畫科教授舊日本畫科教授ヲ特別會員ニ推戴ス

第五條 役員ハ會長一名評議員若干名及ヒ委員若干名トス

第六條 會長ニハ現任東京美術學校長ヲ推シ會務ノ綜理ヲ乞フモ

ノトス

第七條 評議員ニハ正會員中名望アルモノヲ推舉ス

第八條 委員ハ正會員ニアリテハ各卒業期毎ニ一名ヲ互選シ準會

員ニアリテハ三名ヲ選出シ各部ノ會員ヲ代表シテ會務ヲ分擔

スルモノトス

第九條 委員ノ任期ヲ一年トス 但シ再選ヲ妨ケス

第十條 委員中互選ニ依リテ常務委員七名ヲ設ケ常務ヲ處理セシ

ム

會務中急速ヲ要スル場合ニアリテハ常務委員過半数以上ノ決

議ニヨリ會長ノ承認ヲ經テ臨機ノ處置ヲナスコトヲ得

第十一條 會務中重要ノ事項ハ總テ委員ノ會議ニ於テ議決シ會長

ノ認可ヲ得テ之ヲ行フ

第十二條 本會ハ會旨ヲ全フセンカ爲ニ毎年一回會員ノ作品ヲ集

メテ展覽會ヲ開ク 其規則ハ別ニ之ヲ定ム

第十三條 本會ハ毎年度ノ初メニ於テ總會ヲ開ク

準會員ニアリテハ委員ノミ出席スルモノトス

但委員會ノ議決ニ依リ臨時大會ヲ催スコトアルヘシ

第十四條 會費ハ在京正會員ハ年額金壹圓五拾錢在地方ノ正會員

ハ同金壹圓準會員ハ同金五拾錢トシ毎年一月十五日迄ニ全納

スヘキモノトス

第十五條 本規則ハ總會ノ決議ヲ經ルニアラサレハ修正スルコト

附 則

ヲ得ス

東台畫會會員名簿

會長

正木 直彦

特別會員

男爵濱尾 新

寺崎 廣業

會員

横山 大觀

嶋田 佳矣

鶴田 機水

平田 松堂

勝田 蕉琴

矢澤 弦月

高屋 肖哲

山田於菟三郎

島田 友春

鈴川 信一

殿村左五平

小倉 要

小川 三知

丹羽五十吉

櫻井 雪山

岡倉 覺三

小堀 鞆音

下村 觀山

關 保之助

山脇 皜雲

本多 天城

葛谷 龍岬

小林源太郎

岡本 勝元

龜岡 末吉

小栗 常藏

志賀 静山

安藤 時藏

福原謙之助

高橋 勇

加藤 一郎

佐藤榮三郎

久保田 鼎

福井 江亨

溝口禎次郎

伊藤 龍涯

松岡 映丘

大智 勝觀

中村 如等

小泉 青堂

倉田 徳松

小島 光眞

原 貫之助

堤 雄長

井上 良慶

小林 一意

高井 元吉

豊岡 東江

鈴木武之助

荒木 寛畝

白濱 徵

渡邊 萊渚

結城 素明

香川 東華

中村 岳陵

平福 百穂

内海 輝邦

鵜殿 長庚

原 陽一

有元徹三郎

志賀貞三郎

戸田 忠雄

菅原 次郎

木村 武山

桑名 三郎

金子 泰	濱中半三郎	松原 善人	渡邊 香涯	荻生 天泉	近藤 治義	西岡 純平	山田 廉
藤卷 嘯月	今田 直策	豊田宇三郎	早崎 梗吉	多賀谷健吉	江村清三郎	塩崎 逸陵	佐々木林風
平井 富夫	山本 光汀	岡田 秋嶺	高城 次郎	相馬治四郎	飯島 撫山	榎本 省三	森田 静也
乾 南陽	川勝勤兵衛	加藤 紀高	河原崎謙吉	磯野 壽吉	相馬 正巳	久保 薰歟	三橋 信吉
木村 俊秀	田中 國廣	川崎 周太	服部 保一	石坂 武一	久保 提多	野生司香雪	伊藤 貞夫
村岡 貞一	小出魯一郎	鶴川俊三郎	鈴木 雪哉	大畑 二郎	武藤 直信	高桑 純吉	坂内龍之助
山崎 勇馬	三浦 二郎	岡村 道三	山縣 丹治	野原 櫻洲	竹田 霞村	增田 牧山	甲斐 英雄
飯尾駒太郎	松平 乘長	大石 榮雄	高橋 玄道	生野 秀峰	大越 直	永田 米吉	石川 巖
藤原美治郎	清家 恕	杉村 僊吉	工藤 晨	室野 素月	朝倉 五郎	川崎 小虎	吉田 清光
梶川 儀夫	森田豊次郎	桃井 義一	松里 清風	丹羽 賢	大串喜代次	浜谷 白雨	中島 湖心
跡見三次郎	移川 浩哉	生井平太郎	綱島 静觀	太田 秋民	下林 繁夫	安井 厚	小森 研甫
竹ノ下舊俊	三浦 自也	伊原 六郎	中田 清	岡田 純二	古東 謙吉	小籾 寛二	南部 茂
宅和 鋼一	岡野 賢三	中原佐治郎	藤井 豊	戸田 天波	渡邊 泰雅	富田 一昭	戸部 隆吉
前波 鶴年	野口 駿尾	有馬 龍秀	杉野松太郎	青山 扶	大山 文吉	跡部 直治	清島 長次
岩井 昌三	今井 重信	佐々木惣三郎	竹内 勝	足立 季彦	篠原 圓次	田村 彩夫	大山 逸八
石野 氏承	關 欽哉	川村 東陽	山邊 知臣	岡村 榮	長井 智覺	白 玄	小森 二郎
足立 啓	岡村 葵園	菅 季吉	秋保 親美	井上 利正	川幡伍一郎	山本信太郎	清水 潔
古田土貞治	伊勢 寛一	小貫 廉	高橋 來平	廣島新太郎	篠田 柏邦	内田 光秋	永田 良亮
秋野 静外	中島 次郎	永倉 茂	西方 俊造	田代 猶喜	高橋 采和	船越 謙	伊藤 順三
腹卷勝太郎	久野亀之助	笹島 秀彌	葛 揆一郎	田鎖 秀峰	川路 誠	麻畑 重	小泉 政吉
川面 義雄	渡邊忠三郎	榎本正之助	長峰登良雄	柏谷 俊彫	中島 研	佐藤 久米	赤坂 永
毛利 教定	護城 惠滿	有安 助二	牧野 左武	河島 義市	堀江 清	木實谷喬壽	丹羽善五郎
前田 千寸	井上 良介	大村 友雄	西村 青歸	徳田 鎬一	赤羽 知足	狩野 誠信	御船 綱手
水上 泰生	橋爪 雪城	小沼 直	平山 謙一	小山 友郷	小倉善三郎	筆谷 等觀	土佐 光一

杉浦 非水	磐瀬 純	田中 雅行	村崎 政親
村上金次郎	浅野 春二	金井 忠三	後藤 浪吉
大聖寺宗三郎	田中 忠彦	鈴木 久治	横山新太郎
高井 潔	田中 春岱	長谷川緑邦	吉原 雅風
福岡 義雄	澤津 昌利	横山 爲雄	井芹 一二
益田 珠城	佐治 友八	植松盛之助	三浦 北峽
金子朔太郎	古賀源四郎	木村 鑛吉	伊藤 豊吉
石島 古城	吉田 正七	水谷 四郎	平木 清光
多田 雄三	桐谷 洗鱗	山村 耕花	永井 幾麻
中川 龍	福富 常三	内山波之輔	水島爾保布
空閑 陽樹	小村 泰助	古田 正記	宮坂 春章
山内 神斧	安村 行雲	大久保應洋	野口安太郎
江森 天壽	森山驥三郎	柏木 正賢	菊澤 武江
奥山 紫明	山下 筑水	鈴木 玉鳳	太田 天洋
上村 重徳	竹内 次郎	廣川榮三郎	山崎 競
村山 旬五	齋藤 謙	吉田 金吉	谷 鏡太郎
横山常五郎	平川 冬嶺	林 竹治郎	鷹田 其石
大塚 泰	島田里喜蔵	大橋幾太郎	渡部 織衛
芳川 廷輔	木元平太郎	中村安太郎	中山 米蔵
山口 大蔵	高橋 政美	木下 眞蔵	三宮 恒
寺門 祐之	石川 廣助	根岸 庄助	立野 甚一
齋藤敬一郎	佐藤悠次郎	龍 信五郎	平井 精一
石本光太郎	岡田 清	狩野 守久	太田 義一
富田賢太郎	林 與	金上 盛三	服部 謙一

加藤丑之助	友田 治夫	齋藤 赫夫	丹羽 芳松
植松 俊郎	西尾 聖	池田 信	得重常太郎
郷倉 與作	山邊 重平	山根 泉介	夏目 利政
池田桃太郎	鴻巣 善蔵	桑田利三郎	佐藤 直己
森 修	田中 恭吉	遠藤 誠	鷹巢 豊治
内田 雅愛	渡邊 繁明	北原 大輔	土岡 泉
阿部 務	西村 平間	小田 繁雄	秋本 一郎
佐々木義政	勝山 恒躬	島内 武敏	森 茂雄
飯野 三六	河口 浩吉	関澄 正己	青木寛四郎
狩野 威信	井桁 晋	土肥 實	福田 久也
吉田 毅	渡邊 政一	關戸三郎右衛門	
田上 尚之	井上豊治郎	山本 茂麿	大塚 庄近
城戸 懋	渡嘉敷真山戸	星川 清雄	浦志 武雄
宮内 龍子	湯川 直春	田中 富彌	麻田 寛嶺
神谷 深	岩田 正巳	加藤 秀男	林 二郎
松浦 孝忠	伊澤晴太郎	穂積 正雄	三宅 一朗
山田 安士	山崎善次郎	米林 武雄	矢部 友衛
樹下 信雄	矢部 季継	友田 宜忠	江 直英

この第二回展における宮内省買上品については次の記事がある。

○東臺畫會の御買上品 五月二十一日、上野に開催せる東臺畫會へ米田侍從臨場せられ、御用品となりたるもの左の如し。

新芽(太田義一) △待宵草(江森大壽) △幽邃(鶴田機水) △雨
あがり(山脇晴雪) △臘月(石島古城) △冬(勝田蕉琴) △柏に
インコ(渡邊香涯) △墨畫山水(本多天城)

(『東京美術学校校友会月報』第十二卷第二号)

翌大正三年は十月に開校満二十五年記念行事があったため展覧会
は見合せ、翌四年三月十九日より四月九日まで竹の台陳列館で第三
回展が開かれ、一八八点が陳列されて五四〇〇人の入場者があつ
た。買上品については上記月報第十四卷第一号に

宮内省御用品

蕭寺訪道 鈴木 雪哉筆

冬 中村 如等筆

雪の渡場 竹の下舊俊筆

皇后宮職御用品

水墨山水 小島 獨山筆

殘照 吉原 雅風筆

殘雪 岩田 正巳筆

と記されている。

同年末、同会は解散し、東台美術会という新組織が成立した(670

頁参照)。

⑫ 小林万吾留学

西洋画科助教小林万吾は明治四十四年二月三日、文部省より満
三ヶ年フランス、イタリア、ドイツ留学を命ぜられ、同年四月二十

六日出発。六月十六日パリに到着し、画室を借りてそこを本拠に博
物館や寺院、諸展覧会を見学し、イギリス、ドイツ、イタリア、ス
ペインを旅行。帰途にロシアへも立ち寄った。大正三年六月三日帰
国。『東京美術学校校友会月報』には彼がフロレンスで水谷鉄也そ
の他の知人と会合した記事(第十二卷第三号)や、帰国後彼が『東京
朝日新聞』に寄稿した「一頭地を抜く仏国の画界」および『毎日新
聞』に寄稿した「歐洲見聞記」の抜粋(第十三卷第三号)の要旨が紹
介されており、また、『美術新報』第十三卷第十、十一、十二号に
彼は「滞欧中の所感」を寄稿しているので、留学生活の一斑を窺い
知ることができる。なお、東京芸術大学芸術資料館には彼の留学中
の模写であるシャルダン作「カルタの城」、ゴヤ作「灰色の服の婦人
像」(いずれも大正四年買入れ)、シャヴァンヌ作「貧しき漁夫」(大
正三年生産)が收藏されている。

⑬ 白馬会解散

本校西洋画科と密接な関係のあった白馬会は、所期の目的を達成
したと個人主義に徹すべき時代になったことを理由に明治四十
四年三月八日に解散を決議した。これについて同年三月十日付『国
民新聞』は次のような記事を掲げている。

◎洋畫界の異彩

白馬會解散す

黒田清輝氏の談話

去る廿九年の創立以來我國洋畫會に多大の貢獻をなし且常に氣運
の先導者として重きをなしたる白馬會は時勢の推移に鑑み此際斷